

グアテマラと日本をつなぐ 第三回

『写真で伝える、写真を選す』 写真家 古谷桂信

CADENA の佐々木さん、私も子育て真最中です。10歳、7歳、4歳の男の子の父親をしています古谷桂信です。

出身は、第1回を書かれた栗田さんが住んでいる高知県です。過疎と高齢化が凄まじい勢いで、進展している高知県の実情を知る元地方人としては、池川町に居を構えてくれた栗田さんの行動力に頭が下がります。栗田さんの書かれた「開発途上国 - 先進国」の構図と「田舎 - 都市」の関係が似ているという点には、私も同感です。私がグアテマラに惹かれて行ったのは、田舎の濃い人間関係にどっぷり浸かって育ったことも影響しているのかもしれませんが。

さて、私とグアテマラの出合いは、1986年、20歳で出かけた南米、中米、北米への旅でした。古代マヤ文明の遺跡への興味だけの関心で足を踏み入れたグアテマラにマヤ民族が、現在もその文化や伝統を守り、暮らしていることにたいへん驚いたのです。日本では、マヤというと滅亡してしまった文明というイメージしかなかったものですから……。

実際に出会ってしまったマヤの人々に魅了されてしまった私は、翌年87年、工事現場で働いて買った一眼レフカメラ、オリンパス OM4 を手にしてグアテマラを再訪問しました。素晴らしい民族衣装が見られ、マヤの伝統文化が色濃く残る村を目指したのです。1960年から続く内戦まっただなかにもかかわらず、前年、マヤ遺跡ティカルと、アンティグア、アティトラン湖岸を旅した経験だけでは、内戦の危険など、思いもよらないことだったのです。ちょうどこの年に新潮社から出版された『私の名前はリゴベルタ・メンチュウ』を読み返しながらの旅だったけれども、その中に書かれた信じがたい内戦の暴力は、当時の私には、過去のことにはしか思えませんでした。

ところが、私が住み込ませてもらうと訪ねたネバフは、ゲリラ勢力と政府軍がもっとも激しくぶつかっていた地区だったのです。マヤの伝統が強く残る村々こそ、ゲリラが浸透をはかり、また政府軍もゲリラ掃討の拠点を築こうとしていた場所だったのです。しかも、この頃が政府軍の下部組織、自警団がもっとも勢力を誇っていた時期でした。

「自警団の実弾射撃訓練」、「山の稜線に作られた飛行場」、「周辺から集められた住民が暮らす強制収容所のような町」、「メルカードで何かを探す政府軍兵士」、「土塁を積み上げた監視小屋」など内戦のただなかであることを示すものを幾つも目にしながら、現地の状況をわかっていない私は、目に写る光景を理解することができず、当時のグアテマラをよく知る人に教を請うこともしないままだったのです。

日本に帰り、写真を仕事とするようになってからも、87年にグアテマラのネバフ周辺で見たものはずっと気にかかっていた。その後、94年11月、内戦で夫をなくしたマヤ女性の組織コナビグアに住み込んで協力している石川智子さんの話を聞き、合わなかったパズルが組み合わされるように、学生時代にネバフで見た光景の背景が理解できたのです。

それから、石川智子さんをコナビグアに訪ね、95年の選挙、ゲリラの武装解除、内戦の犠牲者が埋められている秘密墓地の発掘を、2000年以降は、再生しようとする各地のマヤの共同体の取り組みを撮影して来ました。それらの写真は、雑誌や写真展などでグアテマラやマヤに関心のある日本人に紹

介してきました。

また、サンティアゴ・アティトランでは、湖水とともに暮らす人々の生活を、過去の古い写真と比較することで過去からの変化と将来の生活を考えてもらうという企画に市の行政とともに取り組みました。その成果は、2002年12月末、サンティアゴ・アティトランで写真展を開催し写真を市に贈呈することで地元へ還元してきました。人数は推計ですが、一日二千人、10日間で約二万人が来場してくれたのです。

このサンティアゴ市での経験と、グアテマラ各地で見聞きした情報の隔絶ぶりをあわせて考える中で、サンティアゴ・アティトランの『水と人々の暮らし』の写真だけでなく、他の各地で撮らせてもらった写真も現地に返すべきではないかという思いが募ってきたのです。

グアテマラの新聞は首都だけでしか編集されていなくて、地方紙は存在していません。首都と地方、また特に地方同士でも、地域の住民に必要な、望まれている情報がまったく共有されていないことを強く感じます。地方からは、情報発信する媒体がラジオ局くらいしか存在していないように思えるのです。

グアテマラ各地での写真展というと具体的には、問題点は山積みですが、被写体となった人々の許可を得られ、カトリック教会などの現地組織の協力が得られるなら、なんとか実現して行きたいと考えています。そうすれば、鉱山問題 や、農場占拠などの現在の問題も、写真展を視野に入れた取材や撮影が可能になってくるように思えます。

グアテマラでマヤの人々を撮影させてもらった者の義務、やらなければならないことだと、サンティアゴの写真展を観に集まってくれた村びとの姿を思い返す度に感じてしまうのです。